

小さな勇者
のRPG

ウタカゼ

レベル 4

『小さな一歩、大きな一歩』

作：藤野昂太

僕らの背は、とても小さい。

だから、横たわる木を登るだけでも大変だ。

ごつごつとした木肌をひたすら掴む。掴む。

そしてようやく、終わりが来た。

「やっと、着い、た……！」

大木を何とか登り切り、ざらざらとした表面にペタンと座りこむ。すごい疲れた。

ふう、と一息。

だけど。ここまでたどり着いたことで、ようやく見ることができた。

天を衝くように生い茂る草の向こう側。

夕日を受けてキラキラと輝く、広大な湖。

「長かったあ……」

あの湖を目指して、僕らはどのぐらい歩いたのだろう。村長のしかめっ面を見たのが、ずいぶん昔の話みたいだ。

じーん、と今までの感動にひたっていたら、

「ちょ、と、助け……」

か細い声がした。

後ろの木の崖に、小さな手がかかっていた。ぷるぷる震えてるし。

「ジノ!? なにしてんの!?!」

非力な相棒を引っ張り上げる。

「いやあ、ごめんごめん。助かったよ。ありがとう、カーム」

そう言いながら、彼はドサリと座った。

必死で笑顔を作ろうとしているけど、そんな汗だくの顔じゃキツイよ。

「だから無理するなって言ったのに……」

「何言ってるんのお。俺だってウタカゼなんだぜ？ これぐらい、出来なくてどうするんだよ」

「それはそうだけどさあ……」

「ま。こんな木ぐらい、ちよろいモンだね」

「助けてって言ってたじゃん」

「ほらほらカーム、早いとこ飯にしようぜ」

「話聞いてよ」

僕の言葉を無視して、ジノはお弁当の包みを開いていた。

中身は香ばしい匂いの香る、食パン。

「これに……」

別の包みを取り出すジノ。

中にはさっき獲った魚、をさばい

たものが入っている。

「出来た！」

白身魚をパンに挟んで、完成。

「いただきまーす！」

ガツガツと食べ始めるジノ。

僕もジノと同じように作り、小さく感謝。

「……いただきます」

大地にお礼を言ってから、僕も食事を始める。

澄んだ空気に流れる水の音、土の良い匂い。

そして、ついさっき獲ったばかりのお魚。うん、新鮮で美味しい。

少しばかり、体力が回復した。

「よーし、じゃあ行くか！」

「早、さっきまでフラフラだったじゃないか」

「もう大丈夫さ。ご飯も食べたし。それにホラ、急がないと村長もうるさそうじゃん？」

「……それはまあ、確かに」

僕らの村の村長はいちいちうるさいのだ。ここでモタモタしていたら、またどんな文句を言われるか分かったもんじゃない。

ほんと、コビット使いが荒い人だ。

「じゃ、行こうぜ！」

「うん、行こうか」

ぱんぱんと木くずを払い、ジノと二人、急な崖を降りていく。ゴツゴツとした木の壁は、登りとは違って降りやすかった。

「えーと、湖に着いたらどうすんだっけ？」

切り開かれた道を進みながら、ジ

ノが話しかけてきた。

「何で覚えてないんだよ……。橋だよ。橋をかけるの」

てくてくと歩きながら、目的の湖へと向かう。

「あーそっか。聞いた時も思ったけどさ、それ、ウタカゼの仕事じゃないよね。土木工事だよね」

「しょうがないよ、困ってる人が居るんだし。そういう人を助けるのが僕らの仕事」

「でもなー、やっぱり釈然としな……」

ジノの愚痴を遮るように、とつぜん疾風が吹いた。そして、夕日を遮る何かの影。

「うわ！」

「ジノ！」

身体の軽いジノが飛ばされそうになり、慌てて抑える。

風が収まった。ぱっと顔を上げる。
どんよりとした雲の下。

巨大な黒い鳥が、らんらんとした目で僕らを睨んでいた。

「カラス！ ジノ、カラスだ！」

「い、言われなくても分かってるよ！」

ジノはあたふたと、腰のパチンコを手を取った。

「カーム、お前も早く準備！」

「う、うん！」

僕も短剣を手取る。

カラスが空へ向かった短く鳴いた。
お互い準備完了。

先に動いたのは、カラスだった。

僕らが動く間もなく、怪鳥は滑るように突撃してきた。

「危ない！」

ジノの叫び声と共に勢いよく突き飛ばされる。

僕が一瞬前まで立っていた場所に、凶悪な爪が振り下ろされていた。

「は、早……」

地面に降り立ったカラスは挑発するように睨んでくる。

「この……！」

「ジノ！ 今度は僕らの番だ！」

勇気を振り絞り、巨大なカラスの足元に飛びかかる。

しかしカラスは飛び上がって、それをかわした。

「届かない……」

こういう時、自分の小ささを実感する。全然届かない。

「こういう時こそ！」

ジノがパチンコで狙いを定め、撃つ。
外した。

「もう一発！」

カラスの方が素早かった。

ジノが弾を撃つより早く、黒い影
は狩りをするように舞い降りてきた。

「わ！」

風圧と翼に打たれ、ジノの身体が
宙に舞う。

「ジノ！」

叫び、カラスの翼を狙う。今度
はかすった。黒い羽が数枚、宙を舞う。

でも、ほとんどダメージは無いみ
たいだ。

巨体が振り向く。悪意の色に染まっ
た目と、正面からぶつかる。

鋭いクチバシが、僕の身体を抉ろ
うと――。

バチリと何かがぶつかる音。

ギャアと悲鳴が上がった。

カラスがよろけ、クチバシは地面を抉った。

「カーム！ 大丈夫か！？」

「うん、大丈夫！」

暴れるカラスの陰で見えないけど、ジノがパチンコで攻撃したらしい、助かった。

ギャアギャアとわめき散らしながら、カラスは再び空へ飛んだ。

「ジノ、もう一回パチンコを……」

「……ごめん、もう弾無いや」

「無駄撃ちばっかしてるからだよバカア！」

カラスが襲ってきた。

急いで草の陰へと隠れる。

「どうすんの？ 弾も無いし、アイ

ツに届くような武器は無いぞ？」

ジノの瞳は焦りで染まっていた。

カラスは上空に陣取ったまま、じつと僕らを探している。これじゃうかつに動けない。

こうなったら……。

「……よし、歌のチカラを使おうか」

「歌？」

僕の急な提案に、ジノは少し困惑したようだった。

「だから、僕ら歌のチカラ、見せてやろうよ！」

「き、効くのかな？ あんなカラス相手に？」

「やってみなきゃ分かんないよ！」

ポーチに入っていたオカリナを取り出す。

「うー……、しょうがねえなあ

……」

ジノも泣きそうな目をしながら横笛をくわえた。

その瞬間。僕らを後押しするかのよう、風が吹いた。

と同時に、僕らを発見したカラスが迫ってきた。

怖い、でも。

「よし、今だ！」

音を奏でる。

悪意をもった生き物を正気に戻すための、歌を。

辺り一面に、心地よい音色が響く。

風にのった音楽は、カラスにぶつかった。

何かが抜け落ちたようにカラスの動きが止まり、そのまま地面へ落ちてきた。

「や、やったのか？」

うずくまったまま微動だにしないカラスに、ゆっくりと近づく。

うっすらと開かれたカラスの眼は、黒々とした、綺麗な瞳をしていた。

「よかった、もう大丈夫みたいだ」

「俺のおかげだな」

「はいはいそうだね」

「流すなよ」

カラスはゆっくりと立ち上がり、感謝するように短く鳴いた後、大空へ飛び立っていった。どうやら正気に戻ったようだ。よかった。

「もう悪いことするなよー」

カラスを見送る。

「さ、行こうか。僕らの仕事が待ってるよ」

「あー………そうか、忘れてた……」

ぶちぶちと文句を言うジノを置いて、
僕は歩き出す。

辺りを赤く照らしていた夕日は、
ゆっくりと沈み込んでいた。急がな
いと、日が暮れてしまう。

「あ、待ってよ！」

ジノが追いかけてきた。

風に揺られた草木がさわさわと揺
れる。

さあ、急ごう。

小さなことからコツコツと。

困っている人のために、僕らは歩く。

〈おしまい〉

©2013 小林正親

©2013 アークライト